

New Valley 見聞記

鈴木 弘 明

I はじめに

アラブ連合は地理的に居住可能なナイル河流域地帯と居住不可能な砂漠地帯との二つの地域に明確に分けられよう。もし飛行機を利用してエジプト上空を飛行した場合、砂漠の中を緑色の帯を成してナイル河が蛇行して流れてゆくを見ることが出来る。砂漠とナイル河の鮮明な対照、これこそエジプトを旅行するものにとって最も印象的な景観の一つである。ナイル河流域はギリシャの歴史家ヘロドトスの「エジプトはナイルの賜」の言葉の示すとおり、肥沃かつ豊穡で全住民の98%が居住している。一方、はてしなく続く不毛の砂漠地帯にも、清冽な水が湧出し、デーツの木々が深緑の陰をおとしているオアシスが点在していて、砂漠の民「ベドウィン」が定住し、農耕に従事している。

New Valley はハルガ(Kharga), ダハラ(Dakhla), ファラフラ(Farifra), バハリヤ(Bahariya), シワ(Siwa)の5大オアシスを指しているものであり、Nile Valley と対比されるものである。中でもNew Valley 開発計画の中心を成しているハルガ・オアシスはファラオや古代ローマ時代から穀倉地帯として有名で、ダハラ・オアシスとともに人口稠密であったといわれている。住民は農産物やデーツを栽培し、家畜を飼育して生活していた。現在でも、ハルガ近郊のヒビス(Hibis)遺跡やキリスト教徒の墓地、灌漑用井戸に往時の面影をとどめている。20世紀初頭以来、断絶した穀倉地帯の夢をとりもどすハルガ開発計画が営々として続けられていたが、1954年に政府委託の地質調査団の勧告にしたがって、ハルガおよびダハラ両オアシスに22の深井戸が試掘されるに及んでNew Valley は一躍脚光をあびるにいたった。なぜなら第1に注目して良いことは深井戸の水量である。ある井戸は日産湧出量1万4000立方メートルにも達した。全井戸の平均日産湧出量は1万立方メートルである。水は自然に噴出し、地下の圧力によって10~30メートルの高さに及んだ。水質検査の結果、水は灌漑に良く適していることが判明した。各深井戸の灌漑能力は300~500フェッ

ダンである。第2に、掘削費および灌漑費が高くないということである。ダハラ・オアシスにおける深井戸掘削費は8000~1万エジプト・ポンドであり、ハルガ・オアシスの場合は1万8000~2万エジプト・ポンドである。深井戸の寿命は約30年と推定され、1フェッダン当たりの灌漑費は、Nile Valley の灌漑地の平均3.5ポンドに比較して、約2ポンドと割安である。

これに力を得て、1956年農林省はハルガ・オアシスのバーリス(Birs)村の北方約3万フェッダンに及ぶ地域の土壌調査を実施した。この結果、この地域は大量の炭酸カルシウムを含有し、農業に適していることが判明した。さらにハルガに隣接する1万7500フェッダンの地域も同様開墾に適していることが明らかにされた。さらにこの地域の2400フェッダンの土壌調査によって、地域により各種の耕作適性があること、土地は最初の数年間家畜の放牧に使用したほうがよいこと、スプリンクラー灌漑を利用することによって、灌漑用水を節約し、人件費や地均費の節減を図ることが可能であることなど判明した。このような注目すべき結果にしたがって、政府は1959年に全砂漠開発庁(General Desert Development Authority)を発足させ、長期間放棄されたままになっていた砂漠開発を推進する機関とした。全砂漠開発庁は24万フェッダンに及ぶ砂漠開発5カ年計画を発表し、そのうち9万6000フェッダンがダハラとハルガのオアシスの開発可能地である。その後、約2年の準備期間を経て、いよいよ本格的な開発を実施するにいたった。

筆者のハルガおよびダハラ・オアシス(注1)訪問の理由は第1に、ゆきつまったアラブ連合の土地開発に新しいフロンティアを提供すべく大量の技術者(高級技術者約200人、下級技術者約600人)および機械を投入したNew Valley 開発計画の実施状況およびその成果を視察することであった。第2には、この開発計画がいわゆるオアシス特有の伝統社会にいかなるインパクトを与え、その経済社会構造にいかなる変容をもたらしたかを見聞することであった。

これは筆者が1963年12月18日から約1週間全砂漠開発庁の御好意によって、ハルガおよびダハラ両オアシスの見学を実施したときのノートをまとめてみたものである。

(注1) オアシスはアラビア語でwāḥat という。小規模なオアシスは bir' といわれている。bir' は井戸の意味で、エジプト、リビア、チュニス等の砂漠地帯の地名に容易に見えてくる。レバノン、シリアの山間部には 'ain 何某という地名が多いが、'ain は元来泉

の意味である。

II New Valley 概観

12月18日午後3時10分、カイロ空港発の U. A. A. Viscount 機に搭乗し、約1時間半後ハルガ空港に到着した。機上から望むハルガは周囲の砂漠から一段と低く、New Valley の名のごとく、細長い低地を形成していた。その中を南北に規則的に砂丘が連なっており、またその近くは、乾燥に良く耐えるガズワリーナで植林され、きれいに区画整理のほどこされた開拓村が望見された。周囲の景観とは対照的にオールド・ハルガの真白なモスクが夕日にはえて印象的であった。空港に到着すると、接待役のアリー・マーヘル (Ali Maher) 氏の出迎えを受けその夜は rest house に旅装をといた。ここでかれの説明および1960年度国勢調査をもとにして、ハルガおよびダハラ両オアシスの概観を記しておく。

まずその自然環境から述べてみよう。ハルガ・オアシスは地図を見ると緯度24~26度の間に横たわっていて、ナイル河流域から約150キロ西方に位置している。南北へ帯状を成して細長く伸びるこの低地の長さは約180キロ、幅は15~30キロで、北西部が大きく広がっていて約80キロに及んでいる。一方ダハラ・オアシスはハルガの

西方約200キロにあって、ハルガよりやや地理的規模が大きい。

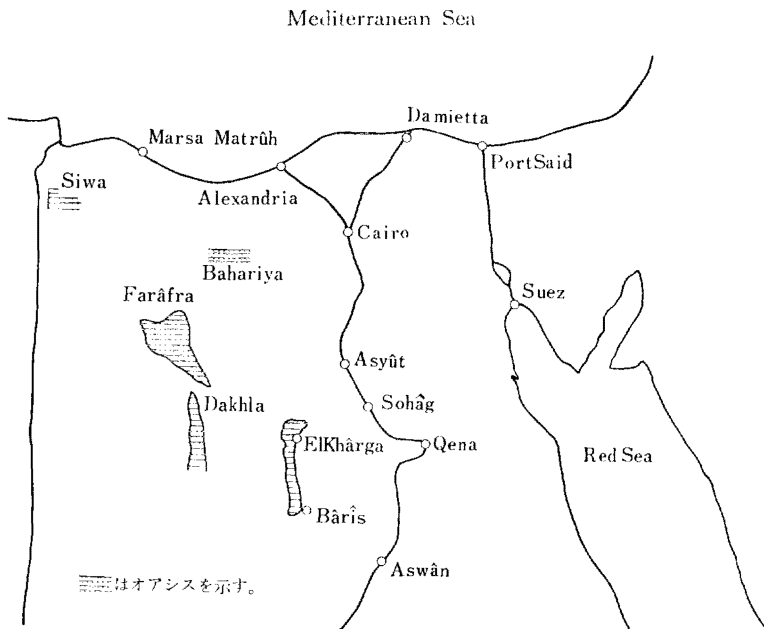
両オアシスの住民は絶えずきびしい自然環境との闘争をしいられている。このような自然環境で第1に問題となるのは「砂」である。砂はこの地域にほぼ1年中吹きまくっている北ないし北西の風によって、すぐに砂丘を形成し、3本の大きな流れとなって、ゆっくりとだが継続的に南方へ移動中である。この砂丘の移動はガズワリーナのような防砂林によって、ある程度その移動方向を変更することは可能であるけれども、移動それ自体を防止することは不可能に近い。恐るべき砂丘はいたるところでオアシスを分断し、小さな村落を孤立状態に陥らせ、村全体が移住しなければならない状態へおいこむ（その最も良い例はハルガ―パリス間に位置しているギナーハ村〈Gináh〉であろう）。

第2の重要な問題は「水」である。New Valley 開発計画が進捗する以前の時代においては、年間降雨量0に等しいこの地域において、水の問題こそ住民の死活を握っていたといっても決して過言ではない（井戸は最も尊重すべき財産である）。水量豊かな深井戸が周囲を完全に緑地に変えつつある今日においても、水の重要性は変わっていない。以前は掘抜井戸や古代ローマ時代の井戸を復活させたりしていた。しかしこれらの浅井戸は砂に埋もれたり、すぐにかれたりする危険性をもっていたと言えよう。

第3に問題となるのは「害虫」である。イナゴやバッタの大集団が突如として畑地におそいかかり1日にして作物の大部分を食い荒してしまうことは稀ではない。農産物やデーツにすべてを託しているオアシスの住民にとって、害虫は恐怖の的であった。

このように Nile 河流域地帯と事情を異にした自然環境のもとに生活している住民はいかなる経済的・社会的状態にあるか述べてみよう。

ハルガ・オアシスの住民数は、1960年国勢調査によれば、2万2346人、ダハラ・オアシスのそれは1万1586人であり、ダハラの人口はハルガの約2倍近くの規模を有してい



る。この両オアシスの人口を New Valley を形成する他の三つのオアシスの人口（ファラフラ、バハリーヤの両オアシスの人口7526人、シワ・オアシスは3839人）と比較しても、両オアシスははるかに大きな人口規模を示しているといえよう。1947年の国勢調査実施当時の両オアシスの人口は3万2503人である。両オアシスの人口は13年間にわずか1429人の増加、年間平均人口成長率0.38%にすぎず、エジプト全域の年間人口成長率2.5~2.8%と比較するといかに低率であるか理解できる。しかしこれは出生率が低いということを意味するのではなく、オアシスにおいては就業機会がなく、ナイル河流域地帯への労働力移動が大きいことを示している。

さらに15歳以上の生産年齢人口を検討してみると、ハルガ・オアシスにおいては男女数はほぼ同一規模であるけれども、ダハラ・オアシスにおいては、女子が男子よりもはるかに多い。この現象はイスラム教で許可されている一夫多妻²⁾を示しているのではなく、男性の単身者の・家計補助的「出稼型労働」による不在を示しているものと思われる。

ハルガ・オアシスにおいて、現在開発計画がかなりの規模で推進されているため、男子はナイル河流域地帯やカイロに出稼ぎにゆくより、ハルガ・オアシスに留まって道路舗装、井戸掘削等の土木事業、運転手・下男・荷物運搬等のサービス部門において労賃を稼ぐ機会が多いものと推定される。

両オアシスとも、アラブ連合の他の地域と同様、女子が職業につく場合はおどろくほど少ない。特にオアシス地域においては、女子の就業機会を主として農業およびサービス部門（主として洗濯、コーヒー運び）にわずかにあるのみである。ハルガ開発計画の一つの工業化目標

であったデーツの製品工場を見学したときにも、従業員約50人は全部男子が占めており、種の除去部門や包装部門のような女子に適した職場においても、女子労働者は見当たらなかった。牧場を視察したときにも同様、男子が搾乳を行っていた。女子は主として家事に専念し、子供の養育に力を入れている。

宗教別住民分布を調べてみると、住民はほぼ全部イスラム教徒である。キリスト教徒は全住民の1%に満たない状態である（ハルガ・オアシス199人、ダハラ・オアシス108人）。キリスト教は多分コプト教であろうと推定される。コプト教では11月をハトゥール（Hâtūr）と呼んで収穫の月としているが、このオアシス出身の出稼労働者がナイル河流域からもどってくるのもハトゥールである。コプト教がどのような役割をこのオアシスにおいて果たしているかは不明であるが、研究に値する問題である。またユダヤ教徒はいない。したがってオアシスにおいてイスラム教の勢力はきわめて強力で、ナイル河流域地帯の各村落と同じように、モスクが村落の中心にあり、村落の精神的基盤となっている。モスクは周囲の貧弱な泥造りの家とは対照的に立派であった。ハルガ・オアシスのみならず、ダハラ・オアシスの中心地ムート（Mūt）村も同様であった。またハルガ開発計画によって設立された開拓村のナーセル村やアルジェリア村等にも、小さな小学校の隣に真白な可愛らしいモスクがあって、村人たちの宗教的な集會が催されていた。さらにイスラム教はオアシス住民の慣習を明確に規制している。たとえば金曜日か休日であるとか、豚肉をたべないとかいう類である。したがってハルガ pilot project の一つである牧場建設に際しては、オランダから高価な乳牛および肉牛を輸入したが、豚は全然いないといってよい。

経済活動別にみると、農業人口が圧倒的に多く、ハルガ・オアシスにおいては有業人口の約60%、ダハラ・オアシスにおいては約83%を占めている。それに反して加工業人口は両オアシスともに4%弱で、ハルガ開発計画の実施以前においてはほとんど工業活動は行なわれていない。現在オアシスとして、かなりの規模である工業は数種ある。一つはトラクター・自動車類の修理工場、家具製造工場、鋳物工場等のコンパインされた国営企業がハルガ開発計画の一環として設置された。第2には前述したようにデーツの製品工場である。これは両オアシスにおいて年産2000トンにおよぶデーツを乾燥し、種を除去し、成型し、包装して商品化し、従来自然のままに低価格で村落市場で販売されていたのを、都市の市場で販

第1表 年齢および性別住民分布

年 齢	ハルガ・オアシス		ダハラ・オアシス	
	男	女	男	女
1歳未満~14歳	2,846	2,522	5,151	4,833
15~19	550	580	638	1,022
20~24	443	428	597	784
25~29	438	458	581	1,011
30~34	345	316	509	701
35~39	358	370	553	731
40~44	219	220	372	437
45~49	246	246	394	442
50~54	233	208	339	378
55~75以上	631	629	1,145	968
不 明	—	—	—	—
計	6,369	5,977	10,279	11,307

現地報告

第2表 経済活動別住民分布

経済活動	ハルガ・オアシス		ダハラ・オアシス	
	男	女	男	女
農業・狩猟	2,047	89	4,508	23
林業	---	---	1	---
畜産業	---	---	1	---
工業	122	---	217	1
建設	175	---	17	---
電気・ガス・水道・清掃	9	---	5	---
商業	335	5	156	---
運輸・通信・倉庫	112	---	36	---
サービス	596	23	435	29
不明	48	---	23	4
無回答	1,639	4,680	2,414	8,826
計	5,684	4,797	7,813	8,883

(注) 5歳以下(男3,751人, 女3,604人)を含まず。

売することを目的としている。デーツの乾燥および殺菌は機械的に実施され、種の除去は10人くらいの男子労働者の手で行なわれており、となりの成型部門においてもほぼ同様な状況であった。包装部門は機械化されており熟練工によって能率的に処理されていた。現在生産量は日産8トンであるが、近い将来日産12トンに引き上げられるという。両工場とも女子労働者は就業していなかったが、トラクターの修理工場には年少労働者が目立ち、デーツの製品工場にはガラビヤを着た農民風の労働者が目立った。両工場はオアシスにおける工業活動の中心であるといえよう。

その他ハルガ開発計画の一環として、1963年1月レンガ工場、5月製粉工場、8月製氷工場、年末にコンクリート製品工場が操業を開始した。

建設部門に従事する人口に関して、ハルガ・オアシスはダハラ・オアシスの10倍である。これはハルガパーリス間の道路舗装、開拓村の井戸掘削、住宅建設等への雇用量が大きいため、ハルガ・オアシスのほうがダハラ・オアシスより開発計画は、進捗しているといえよう。

商業部門においても、ハルガ・オアシスのほうがはるかに活発であり、雇用量も2倍以上である。オールド・ハルガにはスーク(Sûq, 市場)があり、野菜、果実、衣類、日用品を販売している。特にかんづめ類に関してはソ連製のものが多い。なお開拓村(ナーセル村, アルジェリア村)においては、協同組合が商業活動を行なっているものの、石けん、マッチ、食品類等いずれも品質がおち、量的にも不十分で、アスワンにおけるソビエト人

第3表 雇用形態別住民分布

雇用形態	ハルガ・オアシス		ダハラ・オアシス	
	男	女	男	女
雇用主・管理職	88	---	510	---
自営業	894	1	1,322	3
被雇用者(現金収入あり)	2,031	25	1,402	26
家族従業者(現金収入なし)	400	91	2,057	24
被雇用者(現金収入なし)	3	---	94	---
失業者	42	---	23	6
無能者	134	83	236	228
無職	1,492	4,597	2,169	8,596
該当不明	---	---	---	---
計	5,084	4,797	7,813	8,883

(注) 5歳以下(男3,751人, 女3,604人)を含まず。

技師用の協同組合とは、比較にならぬお粗末なものであった。

さらに雇用形態別に両オアシスを比較して一番特徴的なことはハルガ・オアシスにおいては現金収入のある被雇用者が多いのにたいして、ダハラ・オアシスにおいては現金収入のない家族従業者が多いということである。

このことは、第1にハルガ・オアシスにおいてはダハラ・オアシスより雇用機会に恵まれており、わずかながら農業および工業の近代化が進んでいることを示すものである。

第2にダハラ・オアシスにおいて、このような現金収入のない家族従業者の多いということは家計補助的出稼労働者のナイル河流域地帯への拍車をかけているものと思われる。

New Valley とひとくちにいっても、経済社会事情を調査するとハルガとダハラの二つの異なったパターンがあることがわかる。

(注2) 一般にイスラムの一夫多妻主義は面白半分には過大視されて伝えられているが、イスラム教徒の多いアラブ連合においても、一夫多妻は稀である。既婚者の約3.7%が2人以上の妻を所有している。ハルガ、ダハラ両オアシスにおいてもほぼ同様の比率である。しかし離婚されたり、未亡人になる比率はかなり高い。

III 開発計画の実施状況

New Valley 開発計画には工業開発、農業開発の2側面がある。工業開発は開発計画が開始されて以来まだ4年に満たない現在、幼稚な段階を脱却していないものの、前述したように、ハルガ・オアシスに数種の国営企業の

設置をみた。ハルガ開発計画の推進されていない以前の段階と比較してみると、全砂漠開発庁は小規模ながら近代工業を導入し、積極的な開発姿勢を明示したところに格段の相違があるといつてよい。この工業開発の特色はオアシス開発に最適の産業を導入し、農業開発の今後の進捗を援護することを目的としている。現段階では、工業は、(1)農地開墾を援護する目的をもつもの、(2)農産物を製品化することを目的としているもの、(3)オアシス内の必需品を作ることを目的としているもの、の三つに分類される。

(1)はトラクター類の修理工場であり、既に開拓されたナーセル村、アルジェリア村、現在開拓中のパリス村に使用されているトラクターの修理を行ない、トラクター使用が円滑にゆくことを目的としている。機械は各先進諸国のものが導入されていたが、チェコスロバキア製の機械が設置されていたのが印象的であった。また部品用倉庫はきわめて良好に整備され、トラクターおよび機械類がフルに使用できることを目的としているように思えた。鋳物工場は同じくトラクター・自動車類の部品製造を行なっている。

(2)の農産物の製品化を目的としているものにドイツの製品工場と製粉工場があげられる。ドイツの製品工場については前述したが、製粉工場はオアシスで収穫された小麦を製粉してオアシスの需要に応ずることを目的としている。現在までナイル河流域地帯から小麦粉は輸送されてきていたが、この製粉工場の設置により、その必要は解消したといえる。

(3)オアシス内の必需品を作ることを目的としているものにセメント製品工場、レンガ工場、家具製造工場、製木工場がある。

セメント製品工場は主としてオアシス内部における水路に必要なもの、セメント柱、セメントレンガ、敷石等を製造している。

レンガ工場もオアシスの住宅建設に役立てるため、いままで主としてナイル河流域地帯から運んできたものを、オアシス内で自給することを目的としている。

家具製造工場はオアシスにいる多数の技術者およびその家族の需要に応ずるものである。

以上のような工業開発と同時に、雄大な構想と2年間の準備期間を経て実施された農業開発がある。農業開発の特色は三つある。

(1) 事前調査を十分実施したこと。

1959年に全砂漠開発庁が発足して以来、地下水、土壌、

地質、地形の調査を、ユネスコおよびポイント・フォア計画の専門家の協力の下に実施してきた。この事前調査こそ、New Valley 開発計画を成功させた原因の一つである。これに反して New Valley 開発計画より早く実施された Wadi el Natrun 開発計画や Tahrir 開発計画は失敗して、全砂漠開発庁は両開発計画を縮小している。たとえば Wadi el Natrun 開発計画の場合、全砂漠開発庁は土壌および地質調査を事前に十分実施をしないで開拓をおこなった。穀類は灌漑をほどこしても丈低く、赤く枯れてしまったのが実情である。結局塩害を受けたものと推定される。

さらにハルガ開発推進本部には「地形調査課」があり、2万5000分の1、1万分の1の2種類の地形図を製作している。これにより、開拓村位置およびその範囲をきめている。

(2) 大量の技術者を動員したこと。

高級技術者約200人、下級技術者約600人を動員したことは、技術者の不足しているアラブ連合にとっては異例のことである。もちろんこれには多少政治的な色彩もあるといえる。1964年5月のフルシチョフ前首相のアラブ連合訪問の際に、アスワン・ハイダムとともにハルガ・オアシスの開拓村を見せる意図があったからだともいわれている。

技術者の種類はオアシスの全分野にわたっており、地質、灌漑、畜産、農業、電気関係の技術者がいる。かれらはかなり優遇されており、わたくしを案内してくれた若い大学卒の農業技術者たちは、月給40~50ポンドであった。かれらには宿舎が提供され、開発本部近くのキャフェテリアで食事を実費でとることができる。かれらは3~6カ月に1度の割でカイロへ帰ることができ、飛行機代は無料である。このように技術者を優遇し、開発計画に科学的な根拠を与えながら、全砂漠開発庁は本格的に New Valley 開発計画を実施する姿勢を示している。

(3) 農業 pilot project を実施したこと。

1963年の第11回革命記念日に全砂漠開発庁はナーセル村(Nāsr)、ブーラーク(Būlāq)1号(アルジェリア村)、ブーラーク4号、ガルミシーン(Garmishin)1号、ガルミシーン2号の約1165フェッダンをソハーグ(Sohāg)県、アシュート(Asyūt)県の約300家族に分配すると発表した。それに先立ち、全砂漠開発庁はアシュート県の255家族の中から132家族をえらび、またソハーグ県の213家族から176家族を選抜し、革命記念日前に第1回グループとして107家族をハルガ・オアシスへ移住せしめた。

そのうち67家族がナーセル村(現在規模550フェッダン)、40家族がアルジェリア村(現在規模300フェッダン)へ入植した。なおその入植条件はつぎのとおりである。

- (1) 土地の肥沃度および家族規模により多少の差はあるが、1家族あたり5フェッダンの土地が与えられる(最低4.5フェッダン~最高7.5フェッダン)。
- (2) 住居は1家族あたり2部屋で、補助部屋がついている。それに中庭付きである。
- (3) 1住宅あたり35ポンド相当の家具が支給される。
- (4) 第1回収穫まで毎月5ポンドの補助金が支給される。
- (5) 現物給付として小麦、米、バター、野菜類が支給される。
- (6) 家畜は1人当たり10頭支給される。

以上のような入植条件のほか、ナーセル村、アルジェリア村ともに文盲教育のための小学校、村民の精神的基盤となるモスク、商業活動その他を営んでいる協同組合がある。その他農閑期においては、政府の開発事業に参加し1人1日25エルシュの収入を得ているようである。

さてアリー・マーヘル氏の案内で12月19日午前中ナーセル村、午後アルジェリア村を訪問、20日はアブー・マグド(Abu Maghd)氏の案内で、パーリス2号、3号、4号、7号、13号を見学した。21日ふたたびナーセル村を訪問し、カイロのHigher Institute for Social Workの学生たちが協同組合の実態調査を実施しているのを視察した。23日ハルガ・オアシスよりジープで約2時間西方に位置しているダハラ・オアシスを訪問した。

以上の見学過程を通しての印象は、(1)ハルガ・オアシスはダハラ・オアシスより開発計画が進捗していること。(2)開拓村の中では、ナーセル村が一つのモデル村ともいふべきもので、一番良く整備されていたこと。(3)まだ貧弱なものであるとはいえ、文盲教育のための小学校教育が普及していた。それは開拓村のみならず、伝統的な古村マクス(Maks)、カスル(Qasr)にもあって、住民の文盲退治を実施していた(しかし依然として農民の文盲率は高い)。(4)入植した開拓村は現在まで四つあるが、パーリスにある開拓村は現在開拓中であり、将来の発展性が期待される(機械化された大農経営的な要素もある)。(5)ナーセル村およびアルジェリア村の畑地に植え付けられている作物は、主としてアルファ・アルファと小麦、周囲の植林はガズワリーナと作物の種類が定まっていて、まだ試験段階を脱却していない感じである。(6)その他よく聞かれる批判は、開発のコストが非常に高くつくとい

うことである。これだけの資本を投下するならば、別の開墾適地を開発したほうが良いという意見もあった。

IV 伝統的社会の変遷

New Valleyの伝統的社会的変遷を考察する場合つぎの3段階に分けるのが便利である(主としてハルガ・オアシス)。

1. 第1段階(19世紀)
2. 第2段階(ハルガ―アシュート間の鉄道敷設以来1960年まで)
3. 第3段階(ハルガ開発計画実施。1961年以後)

1. 第1段階

19世紀にはまだハルガ―アシュート間に鉄道が敷設されていず、ナイル河流域地帯とハルガ・オアシスはほとんど断絶した二つの生活圏をなしていた。この二つの生活圏を連絡するものは、スーダンからハルガ・オアシスを經由して、アシュートにいたるいわゆる「40日街道」(Darb el-Arba'i)であった。しかしこの街道はきびしい自然環境のために、通行するのに危険性があった。ハルガ・オアシスからナイル河流域への労働移動はごく例外的な場合であり、またたとえ労働移動が行なわれたとしてもハルガに帰って来ることは稀であり、ハルガ・オアシスにおける伝統的社會はそのまま温存されていた。このような伝統的社會はどんな特色をもっているのだろうか。

(1) 経済共同体を形成していること。

この経済共同体を形成している基礎は土地および井戸である。各村落はデーツ林あるいは作物畑のような一定地域に独占的な共同所有権を保有しており、一つの経済共同体を形成している。またオアシス社会特有の経済共同体を最も鮮明に象徴しているものは井戸である。ナイル河流域地帯においては、一つの水系を中心として共同体組織が水利施設を管理しているのと同様、オアシスにおいては共同体が井戸を支配、管理している。オアシスの井戸は2種類あって、一つは村所有の井戸、他方は各部落所有の井戸である。この部落内の各井戸はさらに各血族によって支配され、所有されている。伝統的井戸所有型態の典型は単一血族による井戸所有である。しかしこのような伝統的な井戸所有型態は時代の進展とともに崩壊しつつある。たとえば女子相続あるいはごく最近に売買により、井戸の所有権が譲渡されるようになった。この二つの譲渡方式は男系血族の財産保護のために、以前には認められないものであった。さらに井戸の所有型

態は二つあり、古典的な井戸それ自体を所有する所有型態から、井戸から湧出する水を所有する所有型態への移行が認められる。

(2) 自給自足的な性格の強いこと。

ハルガ・オアシスに点在する各村落は19世紀においては砂丘や砂漠によって分断されて、孤立状態に陥っていたといつてよい。各村落は他村との交渉にとほしく、自給自足的で閉鎖的である。各村落は自給自足的な経済体制をもっているといつてよく、わずかに砂糖、茶、石けん、衣類がナイル河流域から流入していた。したがってナイル河流域地帯との商業関係、各村落間の商業関係は成立していなかったとみてよい。各村落で生産される産物は大同小異で、各村落特有の産物に乏しく、商品交換関係が成立していなかった。また各村落を連絡する交通事情もわるく、トラック交通が行なわれるようになった今日においても、各村落間の商業関係を促進するにいたっていない。

(3) 血族関係の重視。

血族と村落内の各部落との関連は今日希薄になりつつある。しかし19世紀においては同族結婚は理想的なものと考えられていた。そしてオアシスの各部落間には血族的な関連が強固に存在していた。ここにおいて同族結婚というのは父系血族との結婚を意味し、非同族結婚は母系血族との結婚を意味する。今日においては非同族結婚が一般化して、男系血族の支配は変化しつつある。

(4) 村落の行政組織およびオアシス内の閉結意識について。

村落は経済的に自給自足的な社会を形成しているが、行政的には一つの自治的組織を有している。オアシスにおいてオムダ (omda) は村長であり、多数のシャイフ (sheikh) によって補佐されている。オムダは古い家系に所属しており、村落を代表しているが、シャイフは各部落を代表している。オムダの上には国家の地方行政組織が存在するのみで、オアシスにおいてオムダ以上の階級は存在していない。

またハルガ・オアシスに属している5カ村は各々独自の社会組織を有しており、相互に他村落に対して敵意をもっているものの、ナイル河流域地帯の住民に対して一つの閉結意識を所有していて、対抗関係に立っていたといつてよい。ハルガ・オアシスの住民はナイル河流域地帯の住民をフェラヒーン (fellahin——水呑み百姓) と蔑視するし、逆に後者は前者を未開の民と軽蔑する。特に政府から派遣されてきた役人はその意識がつよい。この

ようにナイル河流域地帯とオアシス地域との社会的・文化的隔絶は大きい。

さらにこのような性格を有している伝統的社会からの労働力移動は今日のように大規模でもなく、組織的でもなかった。いわゆる「40日街道」には死の危険性があり例外的に移住してゆく労働者は多くの場合、ナイル河流域地帯への永住を希望するものであって、ふたたびオアシスに帰ってくることを望んではいなかった。したがって今日の労働力移動とはつぎの2点において相違しているといつてよい。

(i) この労働力移動は個人的基盤によるもので、単独に離村の決定を行なった後に、労働者は単独か妻子を連れて離村する (いずれにせよかれの離村決定は部落の住人と関係がない)。

(ii) 村落の劣等者、伝統的社会の不適應者が離村する。以上のようにこの労働力移動は一方交通に近く、小規模で、部落との関連もうすかった。

2. 第2段階

20世紀初頭にいたると、ハルガ—アシュート間に鉄道が敷設されて、労働力の流出を促進するにいたった。1903年、西部砂漠土地開拓会社 (Corporation for the Exploitation of the Lands of the Western Desert) がオアシス北部の広大な土地を開拓する目的をもって設立された。さらに第1次大戦中は鉱物資源 (特に明ばん) の開発、道路建設計画を実施するために政府の関係諸機関が設置されるにいたった。また厚生省はマラリヤをはじめとする風土病根絶計画を推進した。したがって鉄道による労働力の大量移動の可能性が生まれたとはいうものの、ハルガにおける各種の開発計画が実施されるに及んで、オアシス内部における農民が賃労働力化しはじめた。しかし第1次大戦後間もなく西部砂漠土地開拓会社は破産に瀕した。明ばんの採掘はコスト高によって中止された。このような事情の下にいったん賃労働力化した労働者はふたたび農民に転換するにいたった。

いっぽう政府関係の開発計画は予算の裏づけがあるかぎり実施され、継続的には行なわれなかった。それはオアシスにおける気温の関係もあって9月から1月にかけて実施されるので、時期的に農繁期と一致していた。この時期は米の収穫期であると同時に小麦の播種期であり、コプティックのハトゥール月もこの時期にあたっている。オアシスの諺に「もしハトゥール月に種を播かなければ、来年まで待たなければならない」というのがあるくらいハトゥール月は播種の時期を象徴している。こ

の農繁期が過ぎ去り、開発計画が実施されなくなると、農民および賃労働者はナイル河流域へ職を求めて移動してゆく。

この労働移動はオアシスとの紐帯が断ち切られていない「出稼的」性格をもっているものであり、農業に多大に依存している家計を補助する意味をもっている。しかしオアシスにおける家計調査は全然実施されておらず、出稼ぎがどの程度家計に寄与しているかを測定することは不可能に近い。しかし現金のみならず物品送付をも含めて考慮すると、家計寄与率は相当なものであると推定される。この出稼型労働は「個人的な基盤による」あるいは「村落の劣等者」の労働移動とは異なって、家族・血族との連関が深く、家族のうち出稼ぎ可能な者は順次ナイル河流域地帯へ出稼ぎに出かけてゆく。つまり家族の各成員が家計に寄与していることになる。かれらのナイル河流域地帯における滞在期間は普通2～3年でありオアシスへ帰ってくる。1～2年オアシスに滞在してふたたび出稼ぎにゆく循環をくりかえしている。しかしそれは家事のつごうや農繁期にオアシスに帰ってくる短期的な循環過程をとる場合も多い。出稼労働者は特に熟練を必要としない職業に就職をし、掃除夫、下男、パン焼、やお屋の手伝い、行商人、庭師等の職業に就く。このようにサービス部門に就職をすることは、上エジプトの労働者をはじめとし、全エジプトにおける「出稼型労働」の特色である。

このような出稼労働者とオアシスの接触により、伝統的社会はどのような変貌をとげたであろうか。それはつぎの2点に要約できる。

(1) 現金収入の増加によって、伝統的取引である物々交換がなくなり、貨幣経済が浸透した。その結果共同体意識は漸次崩壊し、私的所有観念が発生するにいたった。現金は新しい井戸掘削あるいはローマ時代の井戸の再利用に投資された。この井戸は共同体所有のものでなく、個人の所有になるものである。かれらは井戸が涸れる危険性をさけて、一つの井戸に全貯金を投資せず、分散投資をしたり、自分の所有している井戸から水をくまず村所有の井戸から水を買ったりした。

(2) 出稼労働は家族・血族との連関が深いにもかかわらず、ナイル河流域地帯に滞在して獲得した自由の観念を導入し、部落における強固な家族的結束を崩壊させた。その結果、(i)伝統的なオムダおよびシャイフの権力を無視する。(ii)部落における血族単位の性格が希薄になり、村落相互間の結婚が可能となった。

3. 第3段階

ハルガ開発計画が実施されはじめると、鉄道のほかに航空機が週3回就航するにいたった。これは主として開発計画担当職員および家族のためのものである。さらにハルガーアシュート間に定期バスが運航しはじめ、ハルガはカイロおよびナイル河流域地帯と密接に連絡するようになった。ハルガは面目を一新し、砂漠の中に近代的な住宅が建ちはじめ、植林が行なわれ、道路が整備された。さらに数種類の工場が設置され、パーリス村をはじめとする農地開墾が実施されると、ハルガ・オアシス内部の農民の賃労働化がいつそう進み、かくて出稼労働としての性格を有していたハルガ・オアシスの労働者はオアシス内部に滞留して、継続的に賃金を獲得するにいたった。

いつぼうダハラ・オアシスの住民はより便利になった交通機関を利用して、ナイル河流域地帯への出稼ぎに出かけてゆく。

さらに、オアシスにはソハグ県、アシュート県の農民たちが移住してきた開拓村があり、ここにおいては農民たちはトラクターを初めとする機械力を使用したり、大規模な灌漑施設を有効に利用し、農林技師の好指導と相まって、みごとな成果をあげている。一木一草ない砂漠の中に、完全に緑化された開拓村のみごとな耕地が眼前に展開されたとき、見学にきたわれわれは思わず歓声をあげたくらいである。現在開拓村は300～500フェッダンくらいの規模であるが、1500フェッダンに拡張する可能性をもち、将来の発展性が期待されている。このような「人工オアシス」に対して「天然オアシス」が砂漠に浮かぶ島のように存在している。「天然オアシス」はデーツの林に囲まれており、デーツを唯一の商品作物としている。このような「天然オアシス」こそ伝統的社会的の温床である。「天然オアシス」の住民は保守的で、共同体の紐帯からなかなか脱却できない状況にあるのに反し、「人工オアシス」の住民は進取的で、積極的に合理的な農業技術を取り入れようとして、みごとな収穫をあげようとしている。

第3段階、つまりハルガ開発計画が実施されて以来、New Valley において「ハルガ・オアシス」と「ダハラ・オアシス」の賃労働の性格の相違が明確になってき、さらに開拓村設置による「人工オアシスの住民」と「天然オアシス」の住民の性格が明瞭にちがっていることがよく理解された。

(調査業務部海外業務課)